に歴史小説の隆盛を見るに至りし事等を論ずる所博士の識見を窺ふべし。各論に於ては、元和假武と書籍の刊行、萬治寛文頃に於ける假名草紙の全盛、或は元祿文藝が英國エリザベス朝文藝に比較せらるべきこと、元祿文學と歌舞妓との關係、又八文字屋本、實錄、洒落本、讀本、赤本、青本、合卷、人情本等に至るまで諸種小説本の出版を記し或は其等の梗概を叙し、作者に就ても西鶴、京傳、馬琴、一九、三馬等には特に章を立てゝ之れを説き、其他各時代に出版せられた神道、教訓的著作、軍書、名所記等を併せ叙して、此等著作と其時代の思想界との關係に説き及ぼすところ、著者の周匝なる用意を窺ふべく、又臨所に美術、殊に繪畫に例をとりて評論するところ故博士の學を偲ぶべく兼ねて又遺稿編者の苦心を見るべきものなり（東京日本橋區一丁目大倉書店發行價二、五〇）〔西田〕

◎文學に現はれたる我が國民思想の研究　武士文學の時代

津田左右吉著

既刊「貴族文學の時代」の續稿にして、菊版六百四十八頁、次で上梓せらるべき「平民文學の時代」と相俟つて完成すべしといふ。本書は之を三編に分ち、第一編「武士文學の前期」は承久頃より興國正平頃までの約百五十年間なりとし、第一章「文化の大勢」に於ては、貴族文化衰へ、民間文化未だ發達せざれども、貴族と平民との（世界は雙方より多少相接近したりが、此時代の文化の中心は却て寺院及僧徒にありとし、第二章「文學の概觀、上」（擬古文學）に於ては、和歌、連歌、擬古物語を概説し、當時の貴族文學は彼等の實生活の表現に非ずして、單純なる擬古文學なり、然れども其末期の和歌にありては、却つて實生活の叫びあるを注意し、又第三章「文學の概觀、下」（戰記文學）に於ては此時代の新しき文學なる戰記ものに就て論じ、戰記文學には政治的・道德的意義ありとし、其作者は多く僧徒にして、其文章は非寫實的に、且つ傍觀的の態度なりとし宴曲及詞曲に言及し、第四章「政治思想の發達と樂觀主義」に於て、世の治亂は爲政者の德不德に職由するものとせし當時にありては悲觀主義の色彩を認むる能はずとし、第五章に於て「道德思想」方面にありては、文學に對しても道德眼を以て視んとする傾向ありとなし、武士を支配する根本問題は情にして、儒教及佛教思想は單に文字上の智識に過ぎず、實生活に影響する事少きも、しかも佛教的無常觀の當時人心の一隅に存在せし事は、因襲的思想として「超人間の力と殺伐の氣」（第六章）ありし外に「古典趣味」（第七章）のありし事は拒否すべからずとして、禪宗に伴うて輸入せられし「新來の支那趣味」を併せ叙す。第二編「武士文學の中期」は應安頃より文明頃に至る約百三四十年間とし、第一章「文化の大勢」には一種の武家貴族發生の新現象を説き、武家が公衆に代りて文化の中心

となり、新舊文化の諸要素を悉く結合せんとするところに此時代文化の特徴を見、第二章より第四章に亘りて、此時代の文學を概觀し、手安朝文學の模倣、古典研究が行はるゝと共に、平民文學の先驅とも見るべき幸若舞、謠曲、狂言の發生及發達を記し、第五章「武士的思想」に於て、義經及曾我兄弟が當時人心に深き印象を與へ、主從關係著しく尊重せられて武士生活の基礎を形成し、前期とは稍々色調を異にし來りしも「因襲的思想」(第六章)の勢力は尙ほ看過すべからずして、佛教思想 古典趣味は依然其影を留め、彼等武士が、個人の實力を認識し、人生固有の生活慾が猛然頭角を現し「榮華の希求」(第七章)はこゝに戰國時代を發現せりとす。第三編「武士文學の後期」は明應頃より寛永頃に至る約百五十年間とし、第一・二章に於て「文化の大勢」を論じ、戰國時代の割據主義と德川時代初期の諸要素の結合とを對比し、文化の舞臺は民間に移り、更に地方に普及し、寺院及宿駅は古來久しく占めたりし文化上の地位を失墜せし事を以て此時代の特質とす。第三・四の兩章は「文學の概觀」にして、德川時代初期に於ける文學の新氣運を明かにし、第五章「武士の思想」に於ては所謂三河武士の信念を述べ、主從の情誼を細說し、第六章「儒教佛教神道及基督教の思想」第七章「隱遁思想及び浮世主義」に於ては、彼等武士中に、これ等の思想の存在を指摘し、殊に隱遁思想と浮世主義とが、明日の命さへ知られぬ武士にありて、一致點を有する事に論及して、筆を擱けり。其論調は大體に於て前編と同一なり。(洛陽堂發行、價二、五〇)〔中村〕

佛教之美術及歷史

小野玄妙著

本會は佛教關係の繪畫彫刻等に就ての歷史的研究にして、著者が十餘年來隨時世に公にしたるものを輯めて編次せるものなり。著者は印度西域、支那 日本等に現存の古美術品を佛教經典の方面より考覈せんとし、之れによりて圖相の研究と同時に併せて佛教々學の遷遷發達をも窺はんと企てたるものなり。從つて本書は圖像の說明に於て常に其典據を經論に採り、大藏を博搜して、之れによりて最後の解說を試みんとせるがの主眼なる如し。本書內容を讀むに、第一編「樹木と龍蛇との崇拜」に於ては佛陀伽耶、ブハルフート、サンチ等の初期佛教遺物に就て研究し、其等古畫圖に從來道樹禮拜佛足跡禮拜とせられたるものを否定してフエルガッソン氏等の說を訂さんとし、又第二編「印度古代の美術と本生圖像」には佛本生譚の信仰より、本生圖の傳播等をも論じ、我國現存の玉蟲厨子の橫兩面圖及び天壽國曼陀羅が佛本生譚の一を表はせるものなりと說き其他アジャンタ窟壁畫の本生圖、聚那羅物語等の研究あり。第三編「佛傳圖像雜記」は佛陀の傳記圖像中、佛の忉利天に昇る說話、降魔成道圖等の研究を載せ、第四篇は「健馱羅及び西域の美術と佛教」にして其の藝術の起原沿革、干闐及び龜茲